

印欧語における他動性について(1)

柳 沢 民 雄

0. はじめに

§0. 印欧語研究は、その長い歴史とその豊富な文献資料によって、活格構造理論を構築する際に最も重要な研究の一つであることは疑いない。恐らく印欧語学がなかったならば、活格構造理論の構想は大きな困難に出会っていたであろうと思われる。そのことはクリモフの次の発言がそれを裏付けている。「活格構造理論の成立に最も寄与したのは、印欧語学と能格理論であると言っても、おそらく過言ではなかろう」¹⁾。この点で内容的類型学における印欧語学の研究が占める大きな役割が存在する。本論は印欧語の資料を用いて印欧語の古い層を考察し、それによって活格言語の統語構造を考察しようとするものである。ここで印欧語の統語構造を考察する際に対象とする言語資料は、主としてホメーロスのギリシア語資料であり、その対象は動詞の他動性に関する諸問題である。印欧語の他動性の問題は統語構造の要であって、印欧語の類型的な発達を考察する上では最も重要な課題であると思われる。この他動性範疇の問題は、他動詞と自動詞の対立の問題、相 diathesis (特に受動相の発達)の問題、対格の起源の問題、主体と客体の語彙クラスの問題と深く関わっている。

本論はまずホメーロスの叙事詩における変則的な完了 perfectum の起源問題を扱い、これが印欧語の最も古い層に属する状態動詞であることを示す(1章)。次にギリシア語史における能動相 activum と中動相 medium の関係と印欧語の受動相の発達の問題を扱う(2章)。さらに前章と関連してホメーロスの「イーリアス」における対格の文法範疇の発達を中心に対格の発達と他動性範疇を考察する(3章)。最後に「アクタント актант 理論」²⁾を用いて印欧語の文構造の問題に触れる(4章)。

本論は、主にソヴィエト・ロシアの印欧語研究を参考にして、印欧語の古態的な文構造の再検討を目的にしている。ソヴィエト・ロシアの印欧語研究の中でも特に優れていると思われる古代ギリシア語動詞に関するペレリムーテル I. A. Perel'muter の研究、ホメーロスの「イーリアス」における対格の発達に関するデスニツカヤ A. V. Desnickaja の研究、印欧語統語論のステパーノフ Ju. S. Stepanov、及びガムクレリゼ T. V. Gamkrelidze とイヴァーノフ Vjach. V. Ivanov の研究に本論は多くを負っている。

1. ホメーロスの叙事詩における変則的な完了の問題

§1. ホメーロスの叙事詩において現在の意味をもつ一連の完了が存在する。例えば、*γέγηθα*「喜んでいる」、*δέδορκα*「見つめる」、*μέμωνα*「熱望する」、*οἶδα*「知っている」、*δεῖδω*, *δεΐδια*「恐れる」、*τέθηπα*「驚く」、*προβέβουλα*「の方を選ぶ」、*μέμηλα*「関心事である」、**τεπίηα*「悲しんでいる」、*ἐρρίγα*「身震いする、戦慄する」、*ὄδωδα*「匂いにする」、*τέτριγα*「(動物が)鋭い声を上げる」、**κέκληγα*「けたたましい音をたてる」、*ἀνωγα*「命ずる」、**έλληκα*「金切り声をあげる」、*μέμηκα*「(動物が)鳴く」、*μέμυκα*「吼える」、*γέγωνα*「大声で叫ぶ」、*βέβρυχα*「咆哮する、鳴り響く」、*εἶωθα*「常である」、*εἶοικα*「似ている」である。これらの完了は、純粋に現在の意味をもつ完了であり、それに対応する現在形を持たないか、あるいはそれを持つとしても時制面においても、アスペクト面においても、相 *diathesis* の面においても対応する現在形と区別できない³⁾。

このグループの完了の問題は印欧言語学において再三言及されてきた問題であり、そこには主に二つの仮説が存在する。一つは「先行する行為の結果として生じた主体の状態」という完了の意味に重きを置いた仮説 (Brugmann, Meillet, また一部 Szemerényi, 等) であり、他方は原初の完了の機能を *intensive* 行為と見なし (所謂 *perfectum intensivum*)、*到達された状態* の機能を二次的なものとする仮説 (Curtius, Bréal, Wackernagel, Schwyzer, Debrunner, Hirt, また一部 Szemerényi, 等) である⁴⁾。後者は、完了形の重複された語幹が *intensive* 機能を表すとするこの完了形の外的形式から導き出された仮説であり、重複を表さない完了は後の発達であるとする。例えば、IE **woida* (> Gk. *φοῖδα*) をセメレーニとヒルトはそれぞれ次のように異なって解釈する。セメレーニによれば、「完了は原初的には過去の行為から生じた現在の状態を示す；例えば、*idg. *woida* < *ich habe (heraus)gefunden und jetzt habe ich es, weiß es.* >」⁵⁾；他方、ヒルトによれば、完了 **uoida* は < *ich sehe es, ich sehe es* > を意味する⁶⁾。

しかしこの *intensive* の機能と「到達された状態」の意味機能の間の関連は明らかにできない。また完了形の重複も原初的に固有のものではないとする意見も存在する (Meillet, Burrow, 等)。例えば、メイエは、「印欧語において重複のない完了が存在した。その内で主要なものは以下である：Gk. *φοῖδα*, *φίδμεν*, Skt. *véda*, 1.pl. *vidmá*, Gáth. *vaēdā*, Goth. *wait*, *witum*, OSl. *vědě*, OPruss. *waissei*, *waidimai*。(中略)ギリシア語とインド・イラン語以外の他の諸方言において観察される重複のない形は、印欧語型を示している。その型は恐らく若干の諸方言の中はかなり広く広がっていたであろう。さらにサンスクリットには、*sasāha* と並んで分詞 *sāhván* のような重複のない若干の形がある。充階梯をもつ形における母音 **o* は現在時制形においても部分的に見られ、他方、重複は不安定であるから、印欧語の完了はたんに語尾によってのみ特徴づけられる：語尾 *-a* は Gk.

Fōīda において完了を特徴づける」と述べ、その完了の意味をメイエは次のように特徴づける:「Gk. Fōīda, Skt. véda, Goth. wait 等の重複のない形は、至る所ただ『(私は)知っている』だけを意味する。つまり『私は知識を得て、それを持っている j'ai acquis et je possède la connaissance』の意味である」⁷⁾。

§2. 上で述べたようにこのグループの完了についての問題は、今日に至るも研究者達の統一した見解を得ていない。しかしこの問題に関してペレリム＝テルは、ホメロスの叙事詩の言語を資料にして非常に説得力のある議論を展開している⁸⁾。彼に拠れば、ホメロスのテキストの分析は上の二つの仮説のどちらも支持しない。例えば、γηθέω「喜ぶ」の完了と現在形が現れているイーリアスからの例を参照：

- (1) ὡς δ' ὅτ' ἐν οὐρανῷ ἄστρα φαεινὴν ἀμφὶ σελήνην / φαίνεται ἄριπρεπέα,
ὅτε τ' ἔπλετο νήνεμος αἰθήρ· / . . . / πάντα δὲ εἶδεται ἄστρα, γέγηθε
(perf.) δέ τε φρένα ποιμήν· (Θ 555-559) ⁹⁾

「それはあたかも久方の空に、輝く月をめぐって星の姿がとりわけ瞭きり見え渡るよう、高い空に風も途絶えた折のこと、... 星々ものこらず見えれば、牧人も心に喜びをする。」¹⁰⁾

- (2) “ Ἄτρεΐδη, νῦν δὴ που Ἄχιλλῆος ὀλοὸν κῆρ / γηθεῖ (pres.) ἐνὶ στήθεσσι,
φόνον καὶ φύζαν Ἀχαιῶν / δερκομένῳ, (Ξ 139-141)

「アトレウスの子よ、今こそ多分はアキレウスの無慚な心が、胸の中で喜んでいよう、アカイア軍が殺されて敗走するのを眼にながめて。」

この場合 (1) は叙事詩の語りの部分であり、それに対して (2) は登場人物の発話の部分である。そこでの (1) の完了 γέγηθε は (2) の現在 γηθεῖ よりもより intensive な行為を表すと考える根拠はない。逆に (1) の完了によって表される「牧人の心」よりも (2) の現在によって表される「アキレウスの心」のほうがより intensive である。またこのコンテキストは、完了 γέγηθε の意味として「彼は喜んだ、そして今喜んでい」と解釈させることはない。その意味は現在 γηθεῖ 「彼は喜んでい」の意味と何ら異なっていない。同様に δέρκομαι 「見つめる」の完了と現在のイーリアスからの例を参照：

- (3) ὡς δὲ δράκων ἐπὶ χειρὶ ὀρέστερος ἄνδρα μένησι, βεβρωκὼς κακὰ φάρμακ',
ἔδου δέ τέ μιν χόλος αἰνός, / σμερδαλέον δὲ δέδορκεν (perf.) ἐλίσσόμενος
περὶ χειρῆ· (X 93-95)

「態は、さながら、山に棲む大蛇が洞の口で人を待つよう、劇しい毒を腔に含ん

で、劇い怒りがその身を攻めれば、孔のぐるりとぐるを巻き、恐ろしい眼で
じっと見つめる。」

- (4) Ὡς ἄρα φωνήσας ἀπέβη ξανθὸς Μενέλαος, / πάντοσε παπταίνων ὥς τ'
αἰετός, ὃν ῥά τέ φασιν / ὀξύτατον δέρκεσθαι (pres. inf.) ὑπουρανίων
πετεηνῶν, (P 673-675).

「こう言うと、金髪のメネラーオスは立ち去ったが、その八方に眼を配る姿は、さ
ながらに驚みたよう、大空の下を飛ぶ鳥類中、わけても鋭い眼を持つとされ、」

この場合 (3) と (4) のどちらも叙事詩の語りの部分である。そこでの (3) の完了 *δέδορκεν*
も (4) の現在 *δέρκεσθαι* もどちらも「恐ろしい眼」、「鋭い眼」で「見つめる」の意味で
ある。ここに intensive による意味の違いを認めることはできない。そのどちらも inten-
sive の意味であると見なすことができるからである。また完了 *δέδορκεν* の中に「先行す
る行為の結果として到達された状態」の意味を見ることもできない。またテキストに現
れる動詞のテンス・アスペクトに関しては、後で言及するように現在時との現実性を保
持する「現実的過去」の機能を表す完了は、ホメーロスの叙事詩では直接話法の中の登
場人物の発話のみに現れるが、上で検討したグループの完了は物語の語りの部分にも登
場人物の発話の中にも現れる。また現在形は上の例からわかるようにそのどちらの場合
にも現れている。従って、このグループの完了と現在形に関してテキスト言語学上の違
いをここに観察することもできない。

またペレリムテールによるとこの動詞グループの完了は、ホメーロスの言語において
対応する現在形を全く持っていないか、あるいは対応する現在形を持っているがそれは
完了からの二次的派生と見なされるという。前者の例は *μέμονα*, *τέθηπα*, *οἶδα*, *ᾔδωδα*,
μέμηκα, *βέβρυχα*, *δεΐδια*, *εἶωθα*, *ἔοικα* であり、後者の例として、完了 *ἄνωγα* に対する
現在 *ἀνώγω* の二次性、また完了 *γέγωνα* に対する現在 *γεγωνέω* の二次性は疑いを起こさ
ないという。また現在 *γηθέω*, *μυκάομαι* は、それに対応する完了の語幹と比べると現在
語幹に付加的な要素が見られる：*γηθε-ω* : *γέ-γηθ-α*, *μυκά-ομαι* : *μέ-μυκ-α*。これらの
現在形にみられる要素 *ε*, *α* は、現在形が完了形から派生した二次的起源であることを示
しているという。類似の例：*γεγωνέω* : *γέγωνα*, *ὀπωπέω* : *ὄπωπα*, *δορκάζω* : *δέδορκα*, *θηλέω* :
τέθηλα, *ληκέω* : *λέληκα*, *κλάζω* (< *κλάγιω) : *κέ-κληγ-α*, *τρίζω* (< *τρίγιω) : *τέ-τριγ-α*。
従ってペレリムテールによれば、この動詞グループの現在は完了より後に形成されたと
考えられるとしている。かくしてペレリムテールは次の結論に至る：「*γέγηθα* は単に「喜
ぶ」、*μέμυκα* は単に「唸る」、*δεΐδια* は単に「恐れる」、等を意味するのである。そのよ
うな解釈の大きな利点は次のことにある。我々は如何なる強制も資料に行ってはならな
い。というのもこの解釈はテキストが我々に示してくれることと全く一致しているから

である」¹¹⁾。

§3. ホメーロスの言語には、上述した完了とは別の文法的意味をもつ完了のグループが存在する。このグループは、能動相の完了とそれに相当する能動相の現在とアオリストが自動性対他動性の面に対立する動詞である。ホメーロスからの例：πήγνυμι「突き刺す」-πέπηγα「突き出ている」：πρώτῳ γὰρ στρεφθέντι μεταφρένω ἐν δόρῳ πῆξεν (aor.) / ὤμων μεσσηγύς (E 40-41) -παρά δ' ἔγχεα μακρὰ πέπηγεν (pf.) (Γ 135). ὄλλυμι「滅ぼす, 殺す」-ὄλωλα「死ぬ, 滅びる」：ἦος φίλον ὤλεσε (aor.) θυμόν (Λ.342) -υἴος γάρ οἱ ὄλωλε (pf.) μάχη ἔνι (O 111). ταράσσω「狼狽させる」-τέτρηχα「心配する」：σὺν δ' ἵππους ἐτάραξε (aor.) κυλινδόμενος περὶ χαλκῶ (Θ 86) -τετρήχει δ' ἀγορή (B 95). また類似の動詞は, δαίω「燃やす」-δέδηα「燃える」, ἔλπω「希望を持たせる」-ἔολπα「希望する, 思う」, πείθω「説得する」-πέποιθα「信ずる, 思う」, φθείρω / διαφθείρω「滅ぼす」-ἔφθορα / διέφθορα「滅びる」, 等である。ベレリム-テルによれば, このような対立は古代ギリシア語の後の歴史においてなくなり, 自動的用法においてホメーロスの言語においては全く見られない完了の中動相形が用いられ始めるという(例: Her. VIII, 5. πέπεισμαι)。また他動的に用いられる新しい能動相完了が現れる(例: Lys. XXVI, 7. πέπεικα), それに対して古い完了 πέποιθα は非常にまれに詩の言語に出会うという。

ベレリム-テルによれば, このような動詞グループは上述した第一グループの変則的完了と同様な特徴を持つという。即ち, この第二グループの完了の内の若干の動詞は, 純粋に現在の意味であり, 過去に生じた何らかの行為あるいは出来事を全く表さないという。例えば:

- (5) αἰχμὰς δ' αἰχμάσσοι νεώτεροι, οἱ περ ἐμέϊο / ὀπλότεροι γεγάασι
πεποιθασίν τε βίηφιν. (Δ 324-325)
 「槍はいくらも若い者らが振り廻そうよ, いかさまわしよりずっと生まれた年も遅いし, 腕にも覚えのある者どもがな。」
- (6) ὦ φίλος, οὐ σε ἔολπα κακὸν καὶ ἀναλκιν ἔσεσθαι (γ 375)
 「いや, 若との, けして御身を, くだらぬ臆病者とは思いがけもいたませぬ」
- (7) μαινόμενε, φρένας ἦλέ, διέφθορας: (O 128)
 「気が違ったの, 正気とも思われぬ, 身の破滅ですよ」

また第二グループの完了は第一グループの完了と同様な次の特徴をもつという。即ち, このグループの完了に対応する現在形は, 大部分の場合に完了語幹と比べると追加的要素 *νυ* あるいは *μ* を持つ:πέ-πηγ-α : πήγ-νυ-μι, ὄρ-ωρ-α : ὄρ-νυ-μι, ὄλ-ωλ-α : ὄλ-λυ-

μι (< *ǵl-νυ-μι), ἔ-φθορ-α : φθείρω (< *φθερ-ι-ω), δέ-δη-α (< *δε-δāF-α) : δαίω (< *δαF-ι-ω), τέ-τρηχ-α : ταρασσώ (< *ταραχ-ι-ω). この追加された要素をもつ現在形は完了からの派生を示している¹²⁾. またこの完了に対応する能動相アオリストもシグマアオリストであり, これも同様にσによる二次的派生を示している¹³⁾(上記のホメーロスの例からのアオリスト πῆξιεν, ὤλεσε, ἐτάραξε を参照) : ἔφθειρα < *ἔφθερ-σ-α.

これらの事実は, 第一グループと第二グループの変則的な完了がその起源に関して原初的で古風な姿を呈していることを示している. ベレリムートルによれば, これらの完了のかなりの部分は, 「原初的に孤立した *perfecta tantum* であった」¹⁴⁾ ことを仮定させるとして, これらの完了を次のように特徴づけている : 「これらの語彙の意味は, ある密接に関連したグループに集中している. 変則的な完了のあるものは物質の状態を意味する. そこにあるのは無生物の対象あるいは生物である : δέδηα 「燃えている」(M 466, N 736, 等), πέπηγα 「突き出ている」(Γ 135, N 442, 等), τέθηλα 「(花が) 咲いている」(ε 69, 等), σέσηπα 「朽ちている」(B 135, 等), ὀλωλα 「滅びている」(O 111, Π 521, 等), (δι)έφθορα 「滅びている」(O 128), τέτρηχα 「掻き乱されている」(B 95, 等), ὄρωρα 「起こっている」(B 797, 等). このグループに他動的状態ではなく, 常に存在する性質を意味する若干の完了が結びつく : ἔοικα 「似ている」(α 208, ζ 187, 等), εἴωθα 「常である」(E 766, Θ 408, 等). 多くの類似の完了は心的状態, 思考プロセス, 感覚的知覚を意味する : γέγηθα 「喜ぶ」(Θ 559, ζ 106), τέθηπα 「驚く」(ζ 168, ψ 105), δείδια 「恐れる」(N 49, φ 536), τετίηα 「悲しんでいる」(Λ 555, P 664), ἔρριγα 「身震いする, 戦慄する」(H 114, P 175), πέφρικα 「身の毛がよだつ, 恐れる」(Λ 383, Ω 775), μέμονα 「熱望する」(E 482, H 36), πέποιθα 「信を置く」(Δ 325, Ψ 286), ἔολπα 「希望する」(β 275, γ 375), οἶδα 「知っている」(Δ 163, Z 447), δέδορκα 「見る」(X 95, σ 446). 変則的な完了はまた感覚器官への作用, 音生産行為を表す : ὀδωδα 「匂う」(ε 60, ι 210), βέβρυχα 「咆哮する, 鳴り響く」(P 264, ε 412), μέμυκα 「吼える」(Σ 580, μ 395), μέμηκα 「鳴く」(Δ 435, ι 439), κέκληγα 「けたたましい音をたてる」(E 591, Λ 344), τέτριγα 「鋭い声をあげる」(B 314, Ψ 714), γέγωνα 「大声で叫ぶ」(Ω 703, ε 400)」¹⁵⁾.

ベレリムートルによれば上で引用した古代ギリシア語の資料は, 一連の他の印欧諸語においても確認されるとして, 古代インド語の次の完了の例を挙げている. 第一グループ : *veda* (cf. (F)οἶδα) 「知っている」, *āha* 「言う」, *cākana* 「喜ぶ」, *bibhaya* 「恐れる」, *dīdhaya* 「思う」, 等. また第二グループ : *du-dāv-a* (cf. δέδηα < *δε-δāF-a), *ār-a* (cf. ὄρωρα-α), *jāgar-a* (cf. ἐ-γρη-γορ-α). この際, 注意すべきは, 古代ギリシア語と同様に完了と同じ語根から形成される現在形は, その語幹に完了語幹と比べると追加的要素をもつことである : *du-dāv-a* : *du-no-ti*, *ār-a* : *ṛ-ṇo-ti*.

以上の考察からペレリムートルは、印欧語のこのグループの完了は原初的に動詞体系内部での語形成範疇ではなく、物質的また心的状態を表すための独自の語彙・文法的語クラスを成していたと仮定し、次の結論を導き出している。「主体はその意志に係わりのない任意の状態の中にある；最古の完了によって表される状態は、主体の側からの何らかの活性активность (activeness) を前提としない。まさにこの特徴、即ち主体の不活性инактивность (inactiveness) は、恐らく古態的な完了形が述語の役割の中で現れた文法構文の最も特有な意味特徴を成していたであろう。現在・アオリスト組織と完了組織の間の最古の意味区別は、活性（現在・アオリスト）対不活性（完了）の対立である。（中略）後の印欧諸語の歴史において「完了」は、相範疇、即ち中動相の形式化に影響を与えた。この中動相の若干の人称語尾は「完了」の転換された語尾である」¹⁶⁾。

§4. 上で検討した印欧語の最も古いと見なされる「完了」、即ち perfecta tantum の動詞は、クリモフが提起する活格言語構造における状態動詞と過去において密接に繋がっていたとみなすべき蓋然性は高い。クリモフの活格構造理論によれば、活格言語における状態動詞と語彙的呼応する項は、主として不活性類の名詞である。具体的にそれは、上で述べた物の状態を表す perfecta tantum 動詞を有する文の唯一の項として現れている。ホメーロスからの例を参照：παρά δ' ἔγχεα μακρὰ πέπηγεν (Γ 135) における「長い槍 ἔγχεα μακρὰ」、πάντη γάρ σε περὶ στέφανος πολέμοιο δέδρε (N 736) における「戦いの輪 στέφανος πολέμοιο」、καὶ δὴ δοῦρα σέσηπε νεῶν καὶ σπάρτα λέλυνται (B 135) における「船材 δοῦρα νεῶν」、πόλεμος δ' ἀλίσστος ὄρωρεν (B 797) における「絶え間ない戦闘 πόλεμος ἀλίσστος」、μῦθον Ἰαλεξάνδροιο, τοῦ εἵνεκα νεῖκος ὄρωρε (H 374) における「争い νεῖκος」、ἐσθίεται μοι οἶκος, ὄλωλε δὲ πίονα ἔργα (δ 318) における「肥沃な耕地 πίονα ἔργα」、等。また生物が死んだ状態にあり、その肉体が不活性類の項と見なされるホメーロスからの例：υἱὸς γάρ οἱ ὄλωλε μάχη ἐν (O 111) における「息子 υἱὸς」、ἀνὴρ δ' ὄριστος ὄλωλε, / Σαρπηδῶν (Π 521-522) における「勇士サルペードーン ἀνὴρ ὄριστος Σαρπηδῶν」、μαινόμενε, φρένας ἦλέ, διέφθορας (O 128) における「お前」、等。

また前述したようにホメーロスの言語において perfecta tantum の動詞は、人間の心理的状态や感覚知覚をも意味する。人間が主語として現れるホメーロスからの例：γέγηθε δέ τε φρένα ποιμήν (Θ 559) における「牧人 ποιμήν」、ἀλλη μὲν γὰρ ἐγώ γ' οὐ δείδια χεῖρας ἀάπτους / Τρώων (N 49-50) における「私 ἐγώ」、καὶ δ' Ἰαχιλεὺς τούτω γε μάχη ἐν κυδιανείρη / ἔρριγ' ἀντιβολῆσαι (H 113-114) における「アキレウス Ἰαχιλεὺς」、πάντες δέ με πεφρίκασιν (Ω 775) における「全ての人 πάντες」、εὖ γὰρ ἐγώ τόδε οἶδα κατὰ φρένα καὶ κατὰ θυμόν (Δ 163) における「私 ἐγώ」、ἀλλ' ἄγε, πῶς μέμονας

πόλεμον καταπαυσέμεν ἀνδρῶν; (H 36) における「あなた」, 等. これらは人間の不随意的行為や状態の動詞類であると見なすことができる. この不随意的行為の動詞が, 不活性類の名詞の項と結びつく *perfecta tantum* の動詞と同じ完了の形を印欧語が取ることは注目される. これはアメリカの活格言語の記述研究の分野で用いられる「中間」動詞あるいは「中立」動詞と同じ特徴を持っていると見なすことができる. これらの動詞は特に不活性類の名詞と相関する状態動詞であるが, また活性類の名詞の下でも使用されるからである¹⁷⁾. このような *perfecta tantum* によって述語を形成するタイプの文を以後ではステパーノフに倣って, 「印欧語文のタイプ」と呼ぶこととする¹⁸⁾.

§5. ヴァッカーナーゲルWackernagelによれば最も古い完了の統語的振る舞いの特徴は, 一次的な自動性, 文中における直接補語との完了の結合能力の限定性であるという¹⁹⁾. またこれに関して高津春繁は, 「完了はホメーロス以後ヘレニズムの時代に至る間に急速に用法が変化して, 終にアオリストと同じ機能をもつに至って消滅した. 従って完了には年代による別が極めて重要である.」と述べた上で, 最古の完了としての *perfectum intensivum* に続いて, 「ある動作の完了によって, その結果の状態が現在にそのまま保たれていることを示す完了」に関して次のように述べている: 「この完了も亦現在時に属し, これは状態を表すものであるから, それ自体だけで纏った意味を有する自動詞で, 目的を要しない. 例えば, *πέθνηκα* 《私は死んでいる, 死人の状態にある》 (= I am dead), *σέσηπα* 《私は腐っている》, ... (中略) しかしこの完了は, *οἶδα* 《私は知っている》, *κέκτημαι* 《私は(手に入れて, 今それを) 所有している》の如きものが, 当然目的を取り得る所から, 《知っている》, 《所有している》状態より, 他動詞的にも用いられるに至った. ここから次に述べるある動作の結果の方に重点のある用法が生まれたのであるが, ホメーロスに於いては, この最後の段階は ἤ δὴ μὲν Ὀδυσσεὺς ἐσθλὰ ἔοργε. B 272 《まことにオデュッセウスは数知れぬ功績を成就した, 即ち功績の所有者である》の如くに, 未だ十分には発達せず, 僅かの例が認められるにすぎない.²⁰⁾

また相 *diathesis* に関してデールブリュックらの考えによれば, 古い完了は原初にはただ1系列だけの人称語尾しか持ちえず, 「能動相」の語尾しか持ち得なかった. またバロー Burrow もサンスクリットの完了の中動相語尾は, 現在形の明らかな模倣であるとし, 完了の2つの相の存在は他の動詞組織よりも後の起源であると述べている²¹⁾. この完了が動詞組織の中に組み入れられる過程で, 中動相の完了が発生してくる. 完了の中動相活用の二次的な発生につてペレリムートルは, 多くの資料が証明するとして4つの理由を挙げている: 1) 「能動相完了」の痕跡はほとんどすべての印欧諸語に見られるのに対して, 中動相完了はギリシア語とインド・イラン諸方言しか見られぬこと. 2) 能動相完了の語尾(単数)は独自の, ただ完了にのみ固有な人称語尾を持っているのに

対して、古代ギリシア語の中動相完了の語尾は完全に中動相現在の語尾と一致すること。これに関連して中動相の語尾は現在形からの「借用」であるという仮説が再三述べられてきたこと。3) 古代インド語と古代ギリシア語の中動相現在に能動相完了が意味に関して一致すること(例: módate : mumóda, βούλομαι : (προ)βέβουλα)。4) 能動相完了と中動相との間の形式的結びつきがあり、中動相のある語尾と能動相完了の語尾は共通の起源をもつということ²²⁾。

最も古い完了の単数の人称語尾 -a, -tha, -e は、完了の形態的特徴であり、この語尾は現在形とアオリストの人称語尾に起源を求めることは決してできない。また最も古風な層に属する大部分の完了は、語根に派生標識である o 階梯を見せない²³⁾。

このような古い完了の原初的特徴は、次の状況を仮定させる: この完了は動詞組織の中で孤立した様相を呈している。あるいは動詞組織から離れた別のカテゴリーを形成していた可能性がある。ペレリムテルの次の発言はこれを述べたものである: 「《完了》は言語発達の非常に遠い昔の時代に特別な不変化詞、一種の《状態範疇》であり、それを動詞に統合させたのはただ共通の統語的役割、即ち述語の役割であった」²⁴⁾。またステパーノフによれば、この「物の状態」を表す古い完了は名詞文の述語を起源とする名詞であるとして、この完了の動詞語根に対応する一次的な名詞が存在するとしている。例えば、πέπηγε「突き立っている」: πάγος「岩山、断崖」、πάγη「罨」; δέδηε「燃えている」: δάος「松明、燃え木」; τέθηλα「(花が)咲いている」: θάλος「若枝」、σέσηπε「朽ちている」: σήψ, πός「腐った傷」、σαπρός「腐った」; ὄλωλε「滅びている」: ὄλοός, οὐλος「破滅の、滅びた」; τέτρηχα「掻き乱されている」: τράχων「険しい岩だらけの土地」、等。またステパーノフは、完了形の中に「物の状態」を表す痕跡があるとして、τίκτω「産む」の完了 τέτοκα は女性のみに関係し、それに対して現在とアオリスト τίκτω, ἔτεκον は両性に適応される事実から、「もし完了が原初的な《物の状態》の意味を持たないならば、そのような用法における制限は説明されない」としている²⁵⁾。これは恐らく完了 τέτοκε は「(女は)母である」を意味するためと思われる (cf. 現在形 τίκτω は継続する結果を表す: ἦδε τίκτει σε this woman (has born thee =) is thy mother E. Ion 1560.²⁶⁾)。

古い完了は、相 diathesis に関してその対立する相を持たず絶対的である。また古い完了は本来、直接目的語を持たない。完了形他動的用法の可能性は、後の古代ギリシア語の歴史の中で生じた古代の完了範疇の意味の再解釈、即ち「状態」の意味を「結果性」の意味に再解釈する過程の中で生じた²⁷⁾。高津春繁によれば、「この用法(動作の完了の結果を表す完了 < resultative perfect >) は前500年以後急速に発達したもので、これは状態というよりは、むしろある目的に対して行われた動作の完了後現在につづいた結果を示すものである」としている²⁸⁾。このような古い完了の無客体性は多くの研究者が指摘している。例えば、ガムクレリゼとイヴァーノフは、「印欧語の完了の本来の機能

は(先行する行為の結果として生じた)客体の状態を表すことであった: cf. Hom. ἔοικα 「似ている」, ὄδωδα 「匂いがする」。まさにそのことによって語尾 *-Ha, *-t^[h]Ha, *-e を有する完了の形成と印欧語の中受動mediopassiveとの間の自然な形式的および意味的な結びつきが確立する」とした上で、この完了を次の様に特徴づけている: 「不活性クラスの名詞と用いられる *-Ha, *-t^[h]Ha, *-e 語尾によって形式化される動詞パラダイムの意味論的解釈は、*-mi系列の動詞パラダイムと比較してそれがより後の特徴であるという結論を引き出してくれる。不活性クラスの名詞と用いる動詞構造の意味論的特徴を考慮すると、このパラダイムは、*-mi系列の動詞パラダイムと比較すると欠如的であったに違いない。というも不活性クラスの名詞の意味は、*-Ha系列の動詞構造において伝達行為の参加者である1人称と2人称を除外しているからである。それらの参加者はその独自の意味特徴の理由で不活性クラスの代表者ではありえない。従って、1価不活性動詞パラダイムは、当初から *-e 語尾の3人称単数形のみであり、それは1, 2人称の独自の形に対立していなかった。まさにこのことから3「人称」形は構造的な無人称形であり、人称によるパラダイムの対立を知らなかった。最も古い印欧語の状態のために仮定される任意のシンタグマ In — V-e (In = Inactive, V-e = *-e 語尾動詞 — T. Y.) は、本質的に、不活性クラスの指示対象の状態あるいは性質を表す述語形容詞構文であったに違いない。そのようなシンタグマの述語は、本来的な動詞形としてではなく、述語機能の中の形容詞(名詞)的形成と考えられる。例えば、*ak^[h]men k^[h]ei-e 「石が横たわっている」あるいは *uot^[h]ort^[h] p^[h]H-e 「水は広い」、*neb^[h]es- leuk^[h]-e 「空は明るい」は、無人称動詞(つまり他の人称に対立しない動詞形)として、あるいは述語機能としての形容詞として同程度に解釈できるような述語要素を含んでいる」²⁹⁾。

印欧語の最も古い完了の客体の欠如とともにこの無人称性をまたステパーノフも指摘している³⁰⁾。ステパーノフによれば、完了の「物の状態」と「心的状態」を共通の「環境の状態 состояние среды」として統合する特徴の一つは、無客体的特徴であるが、実際にはまた無主体的特徴であるという。この無主体性は、述語と主体との結びつきがあまり研究されなかったので、今まで研究者の注意を引かなかったとし、ステパーノフは次のように述べている: 「本来の無主体性は、諸言語の完了述語のもとで証言される統語構文のタイプに源を発する。そこでは至る所、無人称文 (Russ. На дворе студит, студено, холодно 「外は冷え込んでいる, 寒い」のタイプ) あるいは対格や与格を付加する構文 (Russ. Мне (dat.) больно. 「私は痛い」, Мне (dat.) ногу (acc.) больно. 「私は足が痛い」, Ногу (acc.) больно. 「足が痛い」; Lith. Man (dat.) galvą (acc.) skauda. 「私は頭が痛い」, 等) が認められる」³¹⁾。さらにバンヴニストの次の発言を参照: 「印欧語では、リトアニア語の変則的な3人称単数が同じ方向を示している(3人称が真の人称ではないこと — T. Y.)。完了の古風な屈折においてもし語尾 1. -a, 2. -tha, 3. -e をその要

素に分析すれば、次のものが得られる：1. $-\alpha_2e$, 2. $-\tau\alpha_2e$, これらに対立するゼロ語尾として機能する 3. $-e$ 」³²⁾。このように印欧語の最も古い完了の無人称性は、多くの研究者らによって指摘されている。そう仮定されるとすれば、イーリアスの $\delta\acute{o}\upsilon\tau\alpha$ $\sigma\acute{\epsilon}\sigma\eta\pi\epsilon$ $\nu\epsilon\acute{\omega}\nu$ (B 135) 「船材は朽ち果てている」を例にとるならば、原初的には「朽ち果てている $\sigma\acute{\epsilon}\sigma\eta\pi\epsilon$ 」という状態を名詞が確定し、具体化していると思なすことができ、この場合、この役割をする名詞は状況語的・規定語的な役割をしていたと考えることができる³³⁾。これはロシア語の Больно 。「痛い」に対する Ногy бoльнo 。「足が痛い」に対応すると見なすことができる。さらに対格をとるオデュッセイアからの完了の例を参照：

(8) οἱ δὲ δῶυ σκόπελοι ὁ μὲν οὐρανὸν εὐρὺν ἰκάνει / ὄξειή κορυφῆ, νεφέλη
(nom.) δέ μιν (acc.) ἀμφιβέβηκε (pf.) / κυανέη· (μ 73-75)

「さて(いま一つの通りには),二つの巨岩があり,その一つは尖った先が広い空にも届くというほど,その天頂をぐるりと雲がとり巻いている」

ここには主語にも目的語にも如何なる変化を呼び起こさない状態が続いていることが表されている。また「到達された状態」として解釈することもできない。「この風景は常に変わらないままである。ここで話題になっているのは神話的現実である」³⁴⁾。この完了形 ἀμφιβέβηκε 「とり巻いている」という状態は、この場合、「黒い雲 νεφέλη κυανέη 」と「それ(頂) μιν 」によって確定し、具体化している。これはリトアニア語の Man (dat.) galvą (acc.) skauda 。「私は頭が痛い」、ロシア語の Мне (dat.) ногу (acc.) бoльнo 。「私は足が痛い」に対応すると見なすことができる。

§6. ペレリムートルによれば、ホメーロスの叙事詩の言語には、上で検討した物の状態や心的状態を表す古い完了の数はかなり多いという。そしてペレリムートルは、最も古い印欧語の動詞体系を「活性 activeness (アオリスト・現在) / 不活性 inactiveness (完了)」の対立と仮定し、その発達を次のように述べている：「相 diathesis カテゴリー、即ち、中動相が形成されたとき、活性 / 不活性の面のアオリスト・現在と完了の対立は、言語にとって現実のものであることを止めた。《中動相の出現とともに完了の相的ポテンシャルは弱体化し始める》(トロンスキー)³⁵⁾。完了が独自の形として保持されており、現在形の中に溶け込んでいない言語において(恐らくこれはスラヴ語において生じた)、その完了の機能領域において前面に出てくるのはアスペクトの意味である。歴史時代の古代ギリシア語にとって完了は、主として特殊なアスペクトである」³⁶⁾。このことは次のように解釈できるかと思われる。前述したように最古の完了は相に関しては能動相(あるいはより正確には相の対立を知らない「絶対相」)であり、対立項である中動相を知らなかった。即ち、活性(アオリスト・現在) / 不活性(完了)のどちらも能動相であっ

た。最も古い不活性（完了）である特殊な「状態範疇」が動詞組織の中に組み込まれ、これが動詞パラダイムを形成始めるに従って、中動相・完了の形成が始まる。前述したようにこの形成は比較的後の形成であることは多くの証拠がこれを証言している。発達した中動相は、古い完了の意味と競合するようになった。中動相・現在と能動相・完了との意味の一致を参照：δέρκομαι : δέδορκα「見る、注視する」、Skt. módate : mumóda「喜ぶ」。これがトロンスキーの言う「完了の相的ポテンシャルの弱化」である。トロンスキーはこう述べている：「δέρκομαι : δέδορκα タイプの対立の中には相的相違はすでない。完了の内部に能動形と中動形の対立がつけられると、独自のカテゴリーとして完了を保持したギリシア語やインド・イラン諸語においてこれが生じているように、完了は最終的に動詞のアスペクトの内の一つになる」³⁷⁾。

この完了のアスペクトの意味は、その後の古代ギリシア語の歴史の中で「過去に生じた行為の結果としての現在の状態」を表すようになって行くと考えられる。ペレリムテルによれば、ホメロスの叙事詩の言語の中にはこの完了のアスペクトの意味の発達を示す層が混在しているとして、それを歴史的に次のように跡付けている：1) 主体にも客体にも如何なる変化をも呼び起こさない行為の意味であり、《到達された状態》と解釈することができない、《状態の意味》(статальное значение)であり、この例は前述した(8)である。ここには先行する行為の暗示は全く見られない。さらにこの状態の意味に継続相の意味をもつ完了が密接に関連する。例えば ἄλλ' αἰὲν ἔχων ἀλλάγημαι οἰζύν, (λ 167) 「(私は)いつも悲嘆にくれながら流浪をつづけている」。これもまた先行する行為の結果としての状態と解釈することはできない。しかし、完了 ἀμφιβέβηκα は、他のコンテキストでは過去における行為とその結果が現在に存在することを示しているという。2) ここに《状態の意味》と《到達された状態》の意味の二様に解釈できる可能性が生じる。例えば, καὶ γὰρ ἐμὸς τέθνηκεν ἀδελφεός, οὐ τι κάκιστος / Ἀργείων (δ 199-200) をペレリムテルは (1) и мой брат мертв「私の兄も死んでいる」、(2) и мой брат погиб (и мертв сейчас) 「私の兄も戦死した(今は死んでいる)」と訳している。また Loeb 版のホメロスの訳者 A. T. Murray は 'For a brother of mine, too, is dead, not at all the meanest of the Argives'³⁸⁾ と《状態の意味》に訳している。岩波文庫の訳者吳茂一は「私の兄もそのおり戦死いたしました、アルゴス勢中武勇で他には後れはとらぬ者でしたが」、と《到達された状態》の意味に訳している。ペレリムテルによればこの段階においても、完了が動詞活用体系の中に最終的に組み入れられていることを意味していないという。というのもこの段階では全ての動詞から完了がつけられるのではなくて、一定の語彙の意味の動詞だけに完了が制限されていたからという。3) 主体の状態もはや表すことなく、過去に生じた行為とそれが現在時と何らかの形で結びつく完了が現れる。例えば, ἐννέα δὴ βεβάασι Διὸς μεγάλου ἐνιαυτοί, (B 134) 'Already have nine

years of great Zeus gone by' (translated by Murray). 同様に ῥὸ δὲ μαίνεται οὐκέτ' ἀνεκτῶς / Ἐκτὼρ Πριαμίδης, καὶ δὴ κακὰ πολλὰ ἔοργε. (Θ 355-356)「プリアモスの子ヘクトールは支え切れぬほど猛り立ち、もう数知れぬ禍いを仕出かしました」; ἦ μὲν δὴ μάλα πολλὰ μάχας εἰσήλυθον ἀνδρῶν, / ἄλλ' οὐ τῷ ποιόνδε τοσόνδε τε λαὸν ὄπωπα. (B 798-799)「私はこれ迄ずいぶん度々武士たちの戦さにも列なりましたが、またこれほどに夥しい軍勢はまだ見た覚えもありません」。この完了は、《状態の意味》と解釈することは不可能であり、我々の馴染みのある過去の行為が現在時と関連する完了の意味である。4)完了が主体の状態を表さず、行為が過去に生じ、それが現在にとって現実性をもつ場合がある。これは3)の意味に近いが、しかしそこには根本的な違いがある。ここで過去の行為と現在時との結び付きは、実際の結び付きというよりも、話者の意識の中での結び付きである。これをペレリムテルは《行為の完了》(マースロフ Ю. С. Маслов の用語³⁹⁾)と名付けている。例えば、ἤδη γὰρ νῦν ἔλπομ' Ἄρηι γε πῆμα τετύχθαι / υἱὸς γὰρ οἱ ὄλωλε μάχη ἐν, φίλτατος ἀνδρῶν, / Ἀσκάλαφος, (O 110-112)「今が今とて、もうアレースに災難がもち上がっているらしいのです。あの人の息子が戦さで死にましたもの、武士の中でも最愛のアスカラボスがね」。完了 ὄλωλε「死んだ」は、ここでは主体アスカラボスの死の状態を表しているのではなくて、話者である女神ヘレがアレースの辛い気持ちを思いながら、この過去の出来事を現在と結びつけている。ここにペレリムテルは、この《行為の完了》が話者の視点から現在時と関連づけられる過去の出来事を指し示すとし、これをまた《現実的過去》と名付けている。そしてこのアスペクトの用法は、話者の観点に規定されない2)や3)の用法とは区別されるべきとして、《現実的過去》の方を主体アスペクトとし、《状態の意味》や継続的な意味を客体アスペクトとしている。この《現実的過去》の役割として現れる完了は、ホメーロスの叙事詩の言語の中では直接話法の中にみられるという。過去を現在時と結びつけるこの完了の《現実的過去》の用法は、話者の視点を必要とするのであるから、直接話法の中に現れるのは当然といえる。ホメーロスの言語の中には praesens historicum の用法は見られないというが⁴⁰⁾、《現実的過去》の用法と praesens historicum の用法とは視点の位置が違ってその物語への態度に同じものが感じられる。

この《現実的過去》の機能において完了は、「原理的に任意の動詞から形成され得る。というも過去における任意の出来事は、任意の状況の中で話者の観点から現実的でありうるからである。この機能の中で完了はまた他動詞からも形成されうる」⁴¹⁾。この機能での完了は生産的であるから、これが後の時代の完了の基本的機能となっていく。後に、ヘレニズム時代にこの完了がアオリストと機能的に同じになり、その結果、完了は消滅に至る⁴²⁾。しかしホメーロスの言語においても《行為の完了》とアオリストが同じ機能で使われている⁴³⁾。その例：ἤδη μὲν πολέων ἐδάην (aor.) βουλήν τε νόον τε /

ἀνδρῶν ἠρώων, πολλὴν δ' ἐπέληλυθα (perf.) γαῖαν· (δ 267-268) 「これまでとて私はずいぶん多勢の英雄たちの心構えも考えようも学んで来たし、ずいぶん広く諸々方々をたずねめぐった」。ここでは完了と同様にアオリストも過去の行為が現在時と関連している。なおアオリストの考察は本論の範囲を越えるものである。

引用文献

- Benveniste, É. *Problèmes de linguistique générale*. 1. Gallimard. 1966.
Burrow, T. *The Sanskrit Language*. London. Faber and Faber. 1955.
Десницкая, А. В. *Сравнительное языкознание и история языков*. Ленинград. 1984.
Гамкрелидзе, Т. В., Вяч. Вс. Иванов. *Индоевропейский язык и индоевропейцы*. 1. Тбилиси. 1984.
Hirt, H. *Indogermanische Grammatik*. T.4. Carl Winter. 1934.
Климов, Г. А. *Типология языков активного строя*. Москва, 1977.
Meillet, A. 1964. *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*. University of Alabama Press. 1964.
Перельмутер, И. А. *Общеиндоевропейский и греческий глагол*. Ленинград. 1977.
Степанов, Ю. С. *Индоевропейское предложение*. Москва, 1989.
Szemerényi, O. *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*. Darmstadt. 1989³.
Тронский, И. М. *Общеиндоевропейское языковое состояние*. Ленинград. 1967.
クリモフ著, 石田修一訳 『新しい言語類型学 活格構造言語とは何か』三省堂. 1999.
高津春繁 『ギリシア語文法』岩波書店. 1960.

註

- 1) Климов, Г. А. *Типология языков активного строя*. Москва, 1977. (『活格構造言語の類型学』[クリモフ著, 石田修一訳『新しい言語類型学 活格構造言語とは何か』三省堂, 1999]) 訳本, p.7.
- 2) Степанов (1989). p. 17 参照.
- 3) 「相 diathesis」は「態 voice」と混同されて用いられることがあるが、印欧語の古体層に見られる動詞範疇は相 diathesis の対立である。これは2章で検討する。
- 4) Перельмутер (1977). p. 5-8 参照.
- 5) Szemerényi (1989³). p. 317 参照.
- 6) Hirt (1934). p. 280 参照.
- 7) Meillet (1964). pp. 206-207 参照.
- 8) Перельмутер (1977) : pp. 5-30 参照.
- 9) ホメーロスのギリシア語は、基本的に以下に拠る：Homer. *The Iliad*. (translated by A. T. Murray). Loeb Classical Library. Harvard University Press. Homer. *Odyssey*. (translated by A. T. Murray, revised by G. E. Dimock). Loeb Classical Library. Harvard University Press.

- 10) ホメーロスの「イーリアス」と「オデュッセイアー」の日本語訳は、以下全て、呉茂一訳「イーリアス」(上)(中)(下)岩波文庫、ホメーロス、呉茂一訳「オデュッセイアー」(上)(下)岩波文庫に拠る。
- 11) Перельмутер (1977) : pp. 14 参照。
- 12) 所謂 -vv- 動詞である。-vv- は現在語幹形成の infix である。要素 1 に関しては高津春繁「ギリシア語文法」pp. 167-168. 参照。
- 13) σ アオリスト (第一アオリスト) のアオリスト組織における二次的起源はよく知られている。Meillet, A. Sur l'aoriste sigmatique. — *Mélanges de linguistique offerts à M. F. de Saussure*. Genève-Paris. 1982. pp. 81-106.; Тронский (1967). p.96. 参照。
- 14) Перельмутер (1977). p. 14. 参照。
- 15) Перельмутер (1977). p. 26. 参照。
- 16) Перельмутер (1977). pp. 29-30. 参照。
- 17) クリモフ (1999). p. 67. 参照。
- 18) Степанов (1989). pp. 19-34. 参照。
- 19) Wackernagel, J. *Studien zum griechischen Perfektum*. Göttingen. 1904.
- 20) 高津春繁「ギリシア語文法」p. 335. 参照。
- 21) Delbrück, B. *Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen*. Tl. 2. Strassburg, 1897, S. 415.; Burrow (1955).p. 344. 参照。
- 22) Перельмутер (1977). pp. 58-59. 参照。
- 23) Schwyzer, E., Debrunner, A. *Griechische Grammatik*. Bd. 2. München, 1950. S. 263.
- 24) Перельмутер (1977). p. 37. 参照。
- 25) Степанов (1989). p. 20. 参照。
- 26) Smyth, H. W. *Greek Grammar*. Harvard University Press. 1984, p.423. 参照。
- 27) Десницкая (1984). p. 132. 参照。
- 28) 高津春繁「ギリシア語文法」p. 335. 参照。
- 29) Гамкрелидзе, Т. В., Вяч. Вс. Иванов (1984). pp. 296-297. 参照。
- 30) Степанов (1989). pp. 26-27. 参照。
- 31) Степанов (1989). pp. 26-27. 参照。
- 32) Benveniste (1966). p. 226. 参照。
- 33) さらにまたバンヴニストの次の発言を参照 : < elle (= la 3^e personne) n'implique aucune personne, elle peut prendre n'importe quel sujet ou n'en comporter aucun, et ce sujet, exprimé ou non, n'est jamais posé comme «personne».> Benveniste (1966) : p. 231.
- 34) Перельмутер (1977). p. 41. 参照。
- 35) Тронский (1967). p.91. 参照。
- 36) Перельмутер (1977). p. 40. 参照。
- 37) Тронский (1967). p.91. 参照。
- 38) Loeb Classical Library. Homer, *Odyssey*. 1995. p. 133. 参照。
- 39) Маслов, Ю. С. *Вопросы глагольного вида*. Москва. 1962. p. 30. 参照。
- 40) 高津春繁によれば, praesens historicum の用法は紀元前500年頃以後に発達したものである。高津春繁「ギリシア語文法」p. 324. 参照。また praesens historicum が非常によく用いられる例を参照 : Ἐντεῦθεν ἐξελαύνει σταθμούς δύο παρασάγγας δέκα εἰς Πέλτας,

πόλιν οἰκουμένην. (Xenophon, Anabasis. I. II. 10-11) 「そこから(キュロスは)行程2日、
10パラサンゲースを人の住む町、ペルタイに進軍する」。

41) Перельмутер (1977). p. 53. 参照 .

42) 高津春繁「ギリシア語文法」p. 334. 参照 .

43) Перельмутер (1977). p. 55. 参照 .